

**東京春祭のStravinsky vol.8**

**ストラヴィンスキーの室内楽**

**永野英樹**（ピアノ）**と仲間たち**

**曲目解説**

**ストラヴィンスキー：イタリア組曲**（ヴァイオリンとピアノのための二重奏版）

　バレエ・リュスの主宰者ディアギレフは、ペルゴレージの作品を用いてバレエ音楽を作曲するよう、ストラヴィンスキーに依頼した。そして1920年に完成したのが、一幕のバレエ音楽《プルチネルラ》で、ストラヴィンスキーは同作をもとにいくつかの室内楽を作った。その1つ、ヴァイオリンとピアノのための《イタリア組曲》は、ポーランド出身のヴァイオリン奏者サミュエル・ドゥシュキンと共同で1934年に編曲したもの。

**ストラヴィンスキー：協奏的二重奏曲**

　1930年、ストラヴィンスキーは上述のサミュエル・ドゥシュキンを知り、意気投合した。そして1931～32年にかけて、ドゥシュキンのためにヴァイオリンとピアノのための《協奏的二重奏曲》を作曲。32年の初演もドゥシュキンとストラヴィンスキーによって行なわれた。当時ストラヴィンスキーが傾倒していたスイスの作家シャルル＝アルベール・サングリアの著作『ペトラルカ』から刺激を受けて書かれたという。

**ストラヴィンスキー：バレエ音楽《ペトルーシュカ》**より**「ロシアの踊り」**

　ストラヴィンスキーの3大バレエ音楽の1つ《ペトルーシュカ》は、1910～11年にかけて作曲された。ペテルブルクの賑やかな謝肉祭の市を舞台に、人形遣いによって生命を吹き込まれた3体の人形が劇中劇を繰り広げる。「ロシアの踊り」は《ペトルーシュカ》の中でもっとも有名な一節だが、今回は1932年、ドゥシキンとストラヴィンスキーがヴァイオリンとピアノ用に編曲したものが奏される。

**ストラヴィンスキー：ピアノ・ラグ・ミュージック**

「ラグタイム」は、19世紀末から20世紀初頭にかけてアメリカで流行したピアノ曲のジャンルで、鋭いリズムのシンコペーションが特徴的。ストラヴィンスキーはその特徴を打楽器的に用いている。1919年の作品で、アルトゥール・ルービンシュタインに捧げられた。作曲者自身も気に入っていたようで、各地で披露したばかりでなく、自演した音源も残されている。

**アンタイル：ジャズ・ソナタ**

　ジョージ・アンタイルは、20世紀アメリカのピアノ奏者。作曲家としては、ストラヴィンスキーの影響を強く受けた前衛的な作風で知られたが、のちにハリウッドに進出して映画音楽の分野でも活躍した。本曲は1922年に作曲された単一楽章の短い作品で、1948年には全3楽章のソナタに書き直された。

**ストラヴィンスキー：タンゴ**

　ストラヴィンスキーは第二次世界大戦開戦直後の1939年、ハーバード大学の講義依頼を受けて渡米し、そのままハリウッドに移り住んだ。本曲はその翌年、アメリカで最初に書かれた作品。単一楽章の短い曲で、タイトル通り、タンゴの雰囲気を湛えているが、タンゴ特有の哀切な旋律より、リズムが強調されている。

**ストラヴィンスキー：サーカス・ポルカ**

　ニューヨークのサーカス団の依頼により、象のためのバレエ音楽として作曲。1942年、ピアノ総譜が完成し、マジソン・スクエア・ガーデンで実際に50頭の象によって踊られたという（振り付けはストラヴィンスキーの友人でもあったジョージ・バランシン）。

**ストラヴィンスキー**（R.ジャッケンドフ編）**：行進曲、ワルツ、ポルカ**

　1914～15年にかけてスイスで作曲された《3つのやさしい小品》は、行進曲、ワルツ、ポルカからなる4手ピアノのための作品。各曲は、ストラヴィンスキーの友人（アルフレード・カゼッラ、サティ、ディアギレフ）に献呈された。同作をクラリネットとピアノのために編曲したレイ・ジャッケンドフは、タフツ大学の言語学科教授で、クラリネット奏者としても活動している。

**ストラヴィンスキー：《兵士の物語》**（ヴァイオリン、クラリネット、ピアノのための三重奏版）

　《兵士の物語》は、2幕6景（全11曲）からなる、バレエ、朗読、演劇など多彩な要素を含む舞台作品で、1918年に亡命先のスイスで書かれた。第一次世界大戦下という窮乏した状況のため、最小限の構成による移動劇場を想定して、7種の楽器による特異な小編成を採用している。初演後、全5曲からなるこの三重奏版が作曲家自身によって編曲され、19年に全曲版と同じスイスのローザンヌで初演された。